

一人一人の思いや願いを尊重し合える学級づくり

－学級活動における探究の対話（p4c）の実践とICTを活用した話し合い活動の工夫を通して－

白石市立大平小学校 齋藤 誠眞

1 はじめに

(1) 授業実践上の課題

小学校学習指導要領（平成29年告示）解説特別活動編（以下学習指導要領解説）では、学級活動の目標について「児童が見いだした課題について、一人一人の思いや願いを意見として出し合い、互いの意見の違いや多様な考えがあることを大切にしながら、学級としての考えや取り組むことについて合意を形成して決定すること」と示されている。

これまでの学級活動における授業実践を振り返ると、一部の児童や教師によって話し合いを進めてしまい、発言が苦手な児童や少数の意見を尊重して話し合いを進めることができなかったことが課題であった。

また、本研究の対象である6年生16名に対して、学級力アンケート^{*1}を実施した結果、「尊重」の項目に対して、肯定的回答をした児童が7人と少なく、課題が明らかになった（図1）。同様に、話し合い活動に関係すると考えられる「学習」と「聞く姿勢」の項目についても肯定的回答をした児童が少ないことが明らかになった。

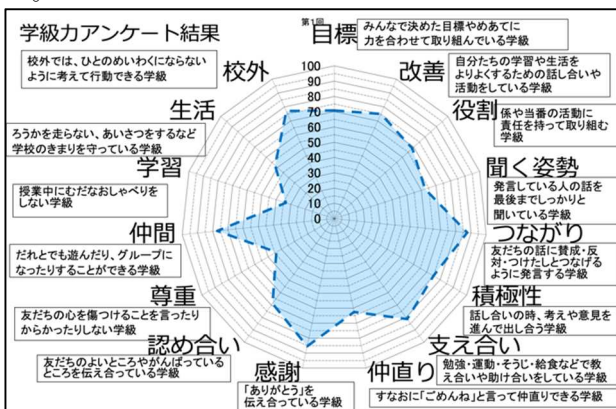


図1 第1回学級力アンケート結果（6月実施）

以上の課題から、安心して話し合いを行うための素地づくりを行いながら、どの児童も話し合い活動に参画するための手立てを講じる必要があると考えた。

(2) 研究主題について

「尊重し合える学級」とは「自分と異なる意見や少数の意見も尊いものとして重んずる学級」と定義し、研究を進める。

2 研究の目的と方法

(1) 研究の内容と検証方法

本研究の目的は、学級活動における探究の対話（p

4c）^{*2}（以下探究の対話）とICTを活用した話し合い活動の工夫を通して、一人一人の思いや願いを尊重し合える学級づくりの方法を明らかにすることである。

本研究は、学級活動（1）の事前の活動、問題意識を高める場面を中心に、2つの手立てを講じる（図2）。

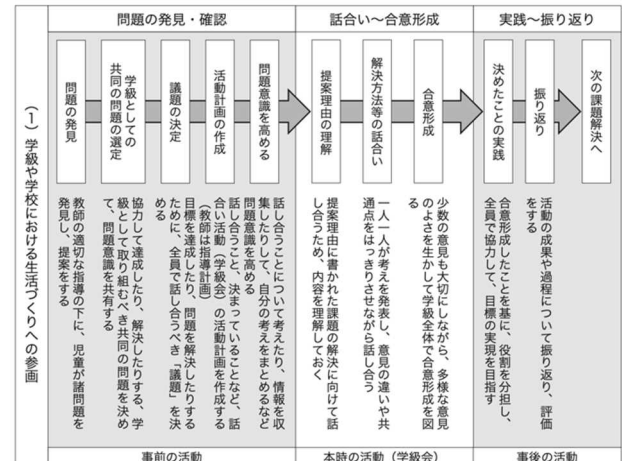


図2 学級活動(1)における指導過程の例示（学習指導要領解説）

研究の対象である6年生16名への学級力アンケートを実施して分析する。また、授業実践の映像、学級会ノートへの記述から児童と学級の変容を考察し、手立ての有効性を検証する。

(2) 研究の手立て

① 探究の対話の実践

探究の対話とは、「白石市教育方針と重点取組」にも盛り込まれている教育手法であり、「宮城教育大学上廣倫理教育アカデミーHP」において以下のとおりに説明されている（図3）。

「探究の対話（p4c）」は、探究の源である「問い」を大切にしています。「不思議だな」「知りたいな」という子どもの「問い」について円座になった参加者が毛糸のコミュニティボールを使って対話を進め、内容を掘り下げながら考えを深めていきます。日々の暮らしや学校での学びの中から生まれた「答えが一つではない問い」について、じっくりゆっくり考える時間は、子どもたちの探究心を育てていきます。対話をとおして考えを深める「探究の対話（p4c）」という教育は、一人一人が互いを尊重して多様な考えを共有することのできる心や集団の絆も育み、安心感（知的セーフティ）のあるコミュニティづくりの実践につながっていきます。

図3 「探究の対話（p4c）」という教育

（宮城教育大学 上廣倫理教育アカデミーHPより）

探究の対話は学級全体で合意形成することを目的としない。一方、学級会では、学級全体で合意形成を図りながら実践することを決定するため、2つの活動の目的の違いがあるが、学級全体で合意形成を図るためには、探究の対話の手法を取り入れて、日頃から友達を尊重しようとする態度を育む必要があると考えた。

朝の時間を利用して、学級会までに、15分間の探究の対話を2回行う。決定した議題に対して、児童が主体的に問いを立てて話し合う活動を行い、議題についての自分の考えを深めさせる。

また、日常的に1週間に2回、探究の対話を実践する。そうすることで、友達の考えを受け止め、認め合い、尊重することのよさを実感させ、安心して話し合いを行うための素地づくりを行う。

② ICTを活用した話し合い活動の工夫

学級全体で合意形成を図ることは簡単なことではない。そのため、問題意識を高める場面において、4人1組の生活班で意見の交流を行う。小集団で合意形成を図る経験を重ねることで、学級全体での合意形成を図ることができるになると考えた。その際、デジタルホワイトボードの付箋機能を活用して、意見を出し合い、付箋を整理しながら比べ合い、小集団としての意見をまとめる（図4左）。ICTを活用することで、発言することが苦手な児童も自分の考えを表現することができると思った。

学級会においては、話し合いの流れやめあて、合意形成のポイントを電子黒板で提示することで、視覚的に理解を促し、児童が主体的に話し合いを進めることができるようにする（図4右）。



図4 ICTを活用した話し合い活動の様子
（左：4人1組での話し合い 右：電子黒板の活用）

3 研究の結果と考察

(1) 授業実践Ⅰの概要と結果

本学級では、4人1組の輪番制で行う計画部を組織し、学級会の企画、運営を児童自らが主体的に行っている。授業実践Ⅰの題材「16人の絆をより深める集会をしよう」は「夏休み前に、お互いのがんばりを労いたい」という児童の思いから、議題として選定された。「集会を行うだけでなく、『16人の絆をより深める』集会にすることで、学級の団結力につなげる」と計画部で方向性を確認し、思いを学級全体で共有した。

事前の活動においては、朝の会を利用して、探究の対話を2回実践した。児童は探究の対話に慣れていない様子だったため、教師がファシリテーターとして、児童の意見を整理しながら行った。1回目は「絆」をテーマにして対話を進めたが、発言する児童に偏りが見られた。2回目は歴史の学習と関連させて「戦いで解決することと話し合いで解決することのどちらがよいか」という問いから対話を始め、1回目よりも発言する児童が増え、話し合うことの必要性について共通理解することができた。

同じく、事前の活動において、デジタルホワイトボ

ードの付箋機能を活用した話し合い活動では、付箋で整理しながら話し合うことが難しく、予定していた15分間で話し合いを終えることができなかった。しかし、一人一人がアイデアを多く出し、発言が苦手な児童も意見を表明することができていた（図5）。

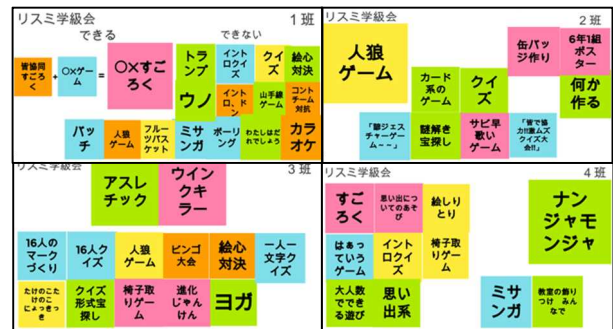


図5 デジタルホワイトボードを活用した各班の意見

学級会では、計画部の児童がそれぞれの役割を全うし、互いに助け合いながら進行する様子が見られた。

話し合いでは、絆を深めるための活動として各班から出された「会話型心理ゲーム」「〇×すごろく」「ウインクキラ」「カードゲームトーナメント」の4つの意見を比べ合った。「以前に失敗したので、再挑戦したい」「話し合いで進めるゲーム性がp4cと似ていて楽しめる」などの賛成意見により「会話型心理ゲーム」に合意形成された。計画部と選ばれた班が連携を取り、ルール係、進行係、カード作成係、装飾係などの役割を全員で分担して、充実した集会活動を実践することができた（図6）。



図6 「会話型心理ゲーム」を楽しむ児童の様子

また、ある児童の学級会ノートには、「会話型心理ゲームでみんなが楽しみ、絆が深まったと思った。今後、もし似たようなことがあったら、今回のように、みんなで楽しみ、絆を深めていきたい」という記述が見られ、提案理由を意識して話し合い、実践することができたと感じていたことが分かった（図7）。

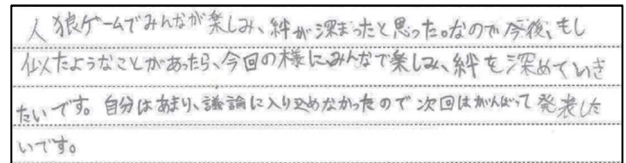


図7 集会活動実践後のある児童の学級会ノートへの振り返り

(2) 授業実践Ⅱの概要と結果

授業実践Ⅱの題材「白石市観光ガイドを通して、4・5年生と交流を深めよう」は「白石市観光ガイドの活動を通して、4・5年生と交流を深めたい」という児童の思いから、議題として選定された。「白石市観光ガイド」とは、総合的な学習の時間として4・5・6年生合同で行った本校で初めての活動である。6年生は、7月

に行った修学旅行で松島高校の生徒から、松島町について観光ガイドをしてもらい、交流を深めた。その経験を生かして、6年生が4・5年生を対象に白石市の観光ガイドを行うという活動である。計画部と打合せをして、前日までの準備期間や当日に交流を深めるための工夫について話し合うことにした。

事前の活動においては、I期と同様に、探究の対話を2回実践した。1回目は「白石市の課題は何ですか」や「都会と田舎、どちらに住みたいですか」など、白石市や町づくりに関する問いを児童が主体的に立てながら、探究の対話を進めることができた。2回目は「これまで、6年生に優しくしてもらった経験はありますか」や「どうすれば、4・5年生が喜ぶだろうか」などの問いを児童が主体的に立て、多くの児童が発言したり、発言できなかった児童も一生懸命に友達の考えに耳を傾けたりする姿が見られた（図8）。



図8 白石市について問いを立てながら対話する様子

デジタルホワイトボードを活用した少人数での話し合いでは、付箋機能を活用した話し合いに慣れてきた様子が見られた。授業実践Ⅰの議題と比較すると、話し合うことが難しい内容ではあったが、4・5年生のことを考えながら、一生懸命に意見を出し合い、比べ合う姿が見られた（図9）。



図9 デジタルホワイトボードを活用したある班の意見

学級会では、話し合いの流れやめあてを提示した電子黒板を計画部の児童が自分たちで操作しながら、進行することができた。話し合いでは、提案者の説明を聞いた上で、理由を明確にして賛成意見を述べる姿が見られた。反対意見を述べる際は、理由も交えて述べたことで、周りの児童は納得している様子であった。理由もなく、一方的に否定する発言はなく、友達の考えを尊重しながら話し合おうとする姿が見られた。「前日までにできること」として「いやいやよゲーム」と「パンフレット作成」、「当日にできること」として「雑談を交えてコミュニケーションを取る」と「クイズガイド」を実践することに決まった。

観光ガイドの6日前に、4・5年生との交流会を行い、「いやいやよゲーム」をして交流を深めたが、下級生のことを考えて実践する難しさに気付いた6年生もいた。当日は、クイズを交えたり、優しく声を掛けたりして、4・5年生と交流を深めながら、白石市観光ガイドを成功させることができた。

(3) 考察

① 探究の対話の実践

探究の対話を実践したことで、友達の考えを認め合うことのよさを実感することができ、安心して話し合いを行うための素地づくりができたと考える。

授業実践Ⅱ後の学級会ノートへの記述では「探究の対話では、議題について深く考えることができましたか」という設問に対して、16人全員が肯定的回答をした。ある児童は「p4cは続けていきたいです。みんなが議題や問いについて、どう考えているか知ることができるからです」と記述し、学級活動における議題の理解にも有効であることが分かった。また「探究の対話を生かして、友達の意見を尊重しながら、話し合うことができましたか」という設問に対しては、15人が肯定的回答をした。理由として『この人はこのように思っているんだ』と新たな気づきが生まれるから」「みんなの考えが聞けて、自由に話し合いができるところがいいところ」「尊重する気持ちが高まり、友達の意見を聞こうとする姿勢を改善できる」などが挙げられた。

「誰が話しても、しっかりと聞いて、受け止め、認め合う」というルールの下で、探究の対話を継続して実践したことにより「友達の考えを尊重しよう」という意識が高まったと考える。探究の対話によって安心して話し合える雰囲気がつくられ、学級会においても児童が積極的に話し合うようになってきた。

一方で、児童の記述から、課題も見られた。ある児童は「15人の視線が一気に集まるので、話しにくいです」と答えていた。「話しやすい」と感じる児童がいる一方で「話しにくい」と感じている児童もいることを踏まえた上で、実践する必要がある。探究の対話には、「パスをしてもよい」というルールもあり、悩んでいる児童には、適宜、声掛けをしてきたが、実際には上記のように感じている児童もいた。探究の対話を実践すれば、必ずしも話せるようになったり、安心感が生まれたりするわけではないことを指導者が理解し、適切な支援をしていく必要がある。

② ICTを活用した話し合い活動の工夫

デジタルホワイトボードの付箋機能を活用した話し合いでは、考えや意見を「出し合う」段階と「比べ合う」段階において、有効であったと考える。とりわけ、発言することが苦手な児童には、より有効であった。

授業実践Ⅱ後の学級会ノートへの記述では「デジタルホワイトボードに自分の考えを書くことができましたか」という設問に対して、15人が肯定的回答をした。とりわけ、発言を苦手に行っている児童は「聞き返されることがなくて、気持ちを楽にして話し合いができる。

これからも使っていきたい」と記述していた。また、その児童は、授業実践Ⅰと授業実践Ⅱの実践後の振り返りにおいても、充実した活動になったという記述をしていた。さらに「これからは積極的に話していきたいです」と話すことへの意欲も湧いてきていた。実際に、他教科のペアやグループでの話し合い活動では、少しずつ、自分から友達に話し掛ける姿が見られた。学級会で、自分から挙手をして発言するまでには至らなかったが、まず他の方法でも、主体的に参画し、協力して実践を成功させる達成感を味わわせることで、少しずつ、次の目標に向けてステップアップさせていくことが大切であると考え。尊重し合う学級を作るためにも、まずは一人一人が思いや願いを表現する環境を整える必要がある。その点では、非常に有効な手立てであったと考える。

しかし、ICTを活用したことで、課題も見付かった。口頭で話し合うよりも時間が掛かることである。今回のICTを活用した話し合い活動は、帰りの会や放課後を利用して実践したが、機器の操作に慣れていなかったり、機器のトラブルが起きてしまうとより時間が掛かったりすることで、児童の意欲を削いでしまうことがあった。

③ 学級力アンケートにおける考察

授業実践Ⅱの後に、第3回学級力アンケートを実施した（図10）。多くの項目において、肯定的回答の割合が高まったことが分かった。とりわけ、学級の最も大きな課題であった「尊重」の項目で大きな変化が見られ、肯定的回答をした児童が14人に増えた。「友達の心を傷付けることを言ったり、からかったりしない学級ですか」という設問に対して「とても当てはまる」と答えた児童は2人と少なかったのだが、第1回よりも評価が上がった児童が10人もいた。また、第1回では「全く当てはまらない」と回答をした児童が複数人いたが、どの児童も「当てはまる」と回答し、学級に対する意識の変化が見られた。同様に、課題であった「学習」と「聞く姿勢」についても肯定的回答をした児童が増える結果となった。話し合い活動において、児童が互いの思いや願いを尊重して話し合うようになり、その結果として、日常的に友達のことを傷付けることを言った

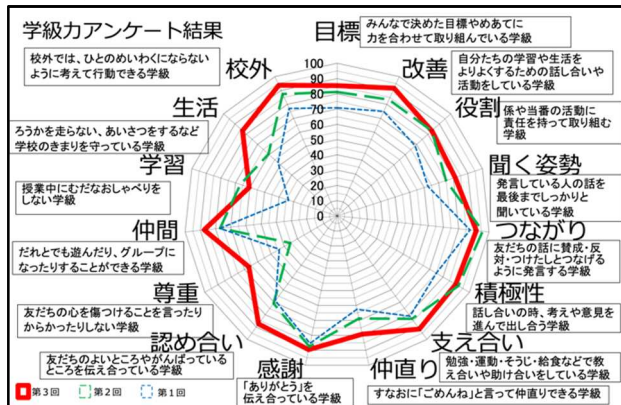


図10 第3回学級力アンケート結果（11月実施）

（第1回 ----- 第2回 —— 第3回 ————）

り、からかったりしないようにする意識が高まったのではないかと考える。

また、学級づくりは、様々な要素から構成されている。学級活動における話し合い活動や探究の対話を継続して行ってきたことが、様々な要素により影響をもたらしたと考える。

4 おわりに

(1) 研究の成果と課題（成果○、課題●）

- 探究の対話の実践により、安心して話し合いを行う素地が形成できた。友達の考えを聞き、尊重しようとする意識を高める事ができた。
- ICTを活用して少人数で話し合いを行ったことで、全員が対等に意見を表現することができた。特に、発言が苦手な児童には、非常に有効な手立てであることが分かった。
- 日常の学校生活において「尊重しよう」とする姿が見られるようになった。
- 探究の対話を実践する場面の設定が難しかった。学級活動で、どのような位置付けをして、どのように実践していくのかを検討する必要がある。
- より有効なICTを活用した話し合いの仕方を検討する必要がある。

(2) まとめ

1年間、2つの手立てを継続して実践したことで、一人一人の思いや願いを尊重し合える学級づくりの方法と課題を明らかにすることができた。

今後は、更に、児童が互いのよさや可能性を発揮しながら、尊重し合う学級を目指して授業実践を続けていきたい。

【注釈】

- *1 早稲田大学教職大学院の田中博之教授が考案した「学級力向上プロジェクト」で使用されているアンケートである。学級力の6つの力「目標をやりとげる力」「自律する力」「話をつなげる力」「友だちを支える力」「安心を生む力」「きまりを守る力」についてアンケートを実施して、その結果を学級力の定義の領域・項目ごとに「とても当てはまる」から「全く当てはまらない」まで4段階でマークし、それらを集計して評価意見の総意を導き出し、レーダーチャートで表している。
- *2 p4cとは、philosophy for children（子供の哲学）のことで、頭文字から作られた略称である。「宮城教育大学上廣倫理教育アカデミー」では、姉妹組織である「ハワイ大学アカデミー」が長年にわたって研究・実践を重ねてきたハワイ型のp4cを基に、日本の公教育が育んできた教育文化に根差した、学校教育に取り入れやすい「探究の対話（p4c）」として、その普及活動に取り組んでいる。

【図表等の許諾について】

図1、図4～図10は、研究の目的にのみ使用することとし、児童の保護者及び所属校の校長から使用許諾を得た。